

3 友達とかかわり合いながら自分達が創る自分達の生活（5歳児）

～「つきほしかがやき隊」・「サッカー」を視点に～

上田 ますみ 高本 洋

・「かがやき隊」を視点に

事例1 つきほしかがやき隊

○「かがやき隊」とは？

クラス内だけでなく、園全体においての係活動として5歳児が取り組むものである。みんなのため（園生活を進めるため）に頑張ることで、自分自身を輝かせようという気持ちをもって取り組んでいる。ルーティンの活動の一つとして、今年度から取り組み始めた。以下の9つの隊がある。

ばとろーる隊・・・かたづけの時に園内を見回り、かたづけが不十分な場をかたづけたり、みんなに知らせたりする

しいく隊・・・・園で飼っている動物（ニワトリ、カメ、文鳥）の世話をする

きゅうきゅう隊・・・手洗い場の石鹸補充、保健だより配布の手伝い、健康な生活習慣を促すポスターづくりなどをする

えほん隊・・・・絵本棚の整理整頓、月々の絵本選びをする

おしらせ隊・・・・降園時などに友達に忘れ物をしないように知らせる

ぎゅうにゅう隊・・・牛乳を配る

ぴかぴか隊・・・・かたづけ時にほうきで掃いたり、弁当前に机を拭いたりする

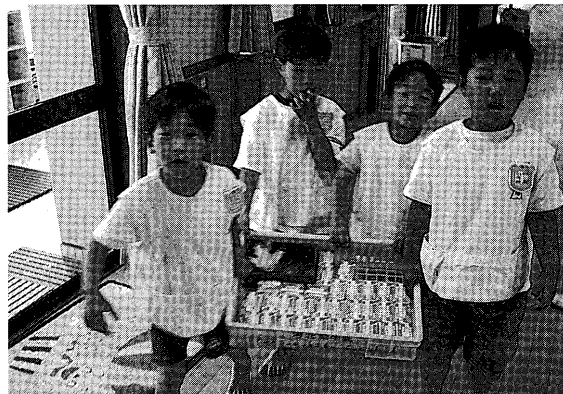
てつだい隊・・・・配布物をお便りばさみにはさむ、材料集めの手伝いなどをする

さいばい隊・・・・水やり、草取り、野菜の収穫などをする

○今年度かがやき隊の活動を生活に取り入れた理由は？

・フリースタイルの遊びに重点をおいた生活の中では一人一人の経験内容に差が生じ、それが育ちの差につながることもある。フリースタイルの遊びの場で力を発揮しにくいタイプの幼児にとり、ルーティン的な活動の場を設定することで育つチャンスが広がるのではないか。

・園生活の中で一人一役を担うことで「自分が園生活の主体者」であるという意識がもてるのではないか。その意識が「自分達が創る自分達の生活」につながると考える。



○「しいく隊」の活動を通して

しいく隊は、他の友達がしたい遊びをしている時間帯に生き物の世話をしたり、飼育小屋の掃除をしたりしている。従って、ほとんど遊ぶ時間はない。

昨年度までは当番制で行ってきた飼育活動を、毎日同じメンバーが取り組むことになったことで飼育活動に対する幼児の取り組みが変わってきた。まず、生き物に対する接し方が変わった。毎日ニワトリ小屋の掃除をしたり、餌をあげたりしているうちにA児がニワトリのことを「ニワちゃん」と呼びながら世話をするようになった。いつの間にか他のしいく隊のメンバーもニワトリを「ニワちゃん」と呼ぶようになり、その呼び名は園全体に広まっていった。そのうち、「カメにも名前をつけよう」ということになり、しいく隊のメンバーが相談をし、「カメッチ」「カメヨ」という名前がつけられた。また、単に世話をするだけでなく、ニワトリやカメを園庭に出して散歩させたり、ブランコや滑り台と一緒に乗ったりする姿も見られるようになってきた。

しいく隊のメンバー一人一人も変わってきた。

事例1-① 「野菜とか、パンくずとか、鯉節とか持ってきてください」 5月10日（金）

しいく隊になったB児は毎日餌を持って登園してくるようになった。

B児 「先生、おはようございます。餌持ってきたよ」

教師 「毎日、ありがとう。ねえ、B児ちゃんばかり餌を持ってくるの大変でしょう。餌をみんなから集めることを考えたらどう？」

B児 「う～ん、どうやって集めようかな」

教師 「みんなにお知らせしたら」

B児 「う～ん」

B児とやりとりをしていると朝のつどいの時間になった。

当番 「お話したいことありませんか」

教師がB児の方を見るとB児が自分から手を挙げた。

当番 「B児ちゃん」

B児 「あの、飼育の餌にするのに野菜とか、パンくずとか、鯉節とかあったら持ってきて下さい」

言い終わるとB児は満足そうな表情で座り、次の話を聞いていた。

人前で話すことが苦手で、これまでほとんど話すことのなかったB児がしっかり話すことができた。担任としてとてもうれしかったので、毎日の餌のお礼と共にそのことを連絡帳で保護者に伝えた。

連絡帳から

<担任から>

毎日、餌ありがとうございます。
「毎日B児ちゃんばかり持ってくるの大変
なら餌を集める方法を考えたらどう？」と
声をかけると、朝のつどいの時に自分から
手を挙げ、「野菜とか、パンくずとか、鰹
節を持ってきて下さい」とみんなの前で話
していました。

<B児の母親から>

係活動、朝のつどいが始まり、朝起こさ
なくても自分で起きてくるし、着替えの時
間も早くなりました。朝のつどいは「お話
ししないで卒園かな・・・」と思っていた
のですが、びっくりしました。頑張ってい
る姿が分かりました。うれしく思います。
ありがとうございます。

事例1-② 「絶対にきちんとしておいたのに」

6月26日(水)

ここ数日、飼育小屋の金網に引っかけてあるはずの文鳥用の餌箱と水入れが落ちてひっ
くり返り、小屋の中が汚れている日が続いている。

C児 「あ、今日も落ちてる」

B児 「これじゃあ、掃除大変」

C児 「絶対にきちんとしておいたのに」

B児 「なんで、こんなになるのかな？誰か、いたずらしてるんじゃない？」

C児 「いたずらしないで下さいって言おうか」

後日、3歳児が飼育小屋の生き物を見に来て金網を揺らしたり、たたいたりしていることが
原因であることが分かった。しいく隊のメンバーは相手が3歳児なら仕方がないと思い、飼育
小屋に来る3歳児に個別に声をかけ、そのような行為をやめさせるようにした。

当番制で取り組んでいた時には、このようなことがあっても気付かなかっただろう。毎日責
任をもち、取り組んでいるからこそ、異常に気付いたのだと思う。また、毎日飼育小屋へ通う
ことでC児は飼育小屋や生き物のちょっとした変化にも気付くようになり、そのことに興味を
もち、クラスのつどいの時に毎日のように報告してくれるようになった。そのおかげで、ク
ラスの他の幼児らにとっても園で飼っている生き物が飼育当番としてかかわっていた時よりも身
近なものになってきたように感じる。

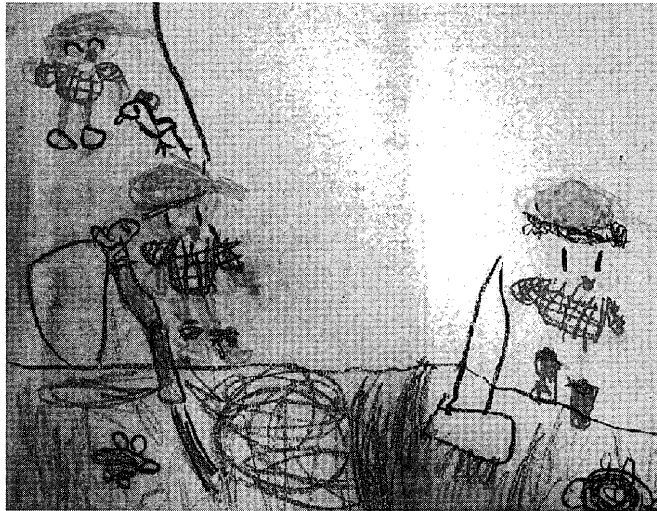
このように、飼育活動をしいく隊が行うことにより、飼育活動や園の生き物が幼児らの生活
の中にしっかりと位置づいてきた。しかし、しいく隊の幼児らはしたい遊びのほとんどの時間
を飼育活動に費やしているが、はたしてこれでいいのだろうかという思いもあった。一学期終
わりの個別懇談でしいく隊のメンバーの保護者にしいく隊の取り組みの様子を伝えると共に、
その思いを正直に伝えた。

事例1-③ 「C児にとっては、しいく隊になれてよかったです」 7月個別懇談

個別懇談で教師はC児の母親に、しいく隊になってからのC児の様子を具体的に伝えた。
その一つ一つのことにC児の母親は「分かる、分かる」といった表情でうなずきながら聞
いていた。

教師 「したい遊びの時間、C児ちゃんはずっとしいくの仕事をしていることが多かったのですが、これで良かったのか、もっといろいろな遊びが出来るようにすればよかったのか、正直言って迷いがあります」

C児母 「家でも、しいく隊の楽しそうに話してくれるんです。実は、年中の時は登園を渋って困ったことも多かったのですが、年長になってからは一度もなくて、飼育があるから早く行かなくっちゃって朝から張り切っています。C児にとっては、しいく隊になれて良かったです」



C児の絵 一学期の思い出「しいく隊の仕事をしているところ」

これは、C児が一学期の思い出という課題のもとにかいた絵である。デッキブラシを使って掃除をしている様子など、しいく隊として毎日取り組んだからこそかけた絵であると思う。4歳児の時のC児の絵は背中に羽が生えた天使をかくなど、現実の世界とはほど遠いメルヘンチックな絵が多かった。絵と同じように言動もメルヘンチックな感じであった。それが、しいく隊の取り組みを通して、C児は現実の世界をしっかりと見て表現できるようになった。

10月、かがやき隊を編成替えし、後期かがやき隊を発足した。しいく隊は前期しいく隊の充実した姿を見ていたからか、一番人気になった。

後期しいく隊の役割は生き物の世話の他に4歳児に飼育の仕方を教えてあげるということがある。5歳児の修了後、飼育の仕事を引き継いでもらうための準備である。一学期のうちから生き物に興味のある4歳児は進んで飼育の仕事を手伝いに来ており、何人かの4歳児はいつ仕事を引き継いでもいいようになっている。11月後半に入ってから、4歳児全員が飼育の仕事にかかわれるよう生活グループごとに順番にしいく隊の手伝いをするようになった。

事例1-④ 「じゃあ、私はここで見ててあげるから」

12月5日(木)

○ は4歳児

⊙(M) 「どうすればいいの？わからない」

この日の4歳児(M児)と(N児)は飼育の仕事をするのが初めてでどうすればよいのか分からない様子だった。

教師 「D児ちゃん、すみれ組さんに教えてあげて」

D児 「はい。まず、にわちゃんの部屋の掃除はうんちをとらなくっちゃいけないの。うんちがあるとお部屋が汚れてニワちゃん病気になるんだよ。うんちはこの銀色のやつでとってね」と言って(O児)に渡す。

(O児) 「分かった」

D児 「後は、ほうきでゴミを一カ所に集めるんだよ」と言ってほうきを一本ずつ(M児)と(N児)に渡す。

(M児) 「はい」

(N児) 「はい」

D児 「じゃあ、私はここで見ててあげるから」と言い、小屋の入り口の所で、4歳児の様子を見守っていた。

途中「ニワトリさんの羽が落ちてるけど、どうすればいいんだろう……？」などという4歳児のつぶやきに対してもD児は「羽もゴミと一緒にさらっておいて」と教えるなど、4歳児の疑問にその都度優しく、具体的に教えていた。

D児は一人っ子で5歳児集団の中では、どちらかというと育ちがゆっくりの幼児である。いろいろな活動にまじめに取り組む面は普段からよく見られるが、友達のかかわりの面ではまだまだ幼い感じで、友達に教えたり、活動をリードしたりすることは少ない。このような育ちに位置しているD児だが、しいく隊の仕事では、自信をもって自分の知っていることを4歳児に教えようとする姿が見られた。

D児にとり、この活動は当番のように順番がきたら「しなくてはいけない」活動ではなく、「自分が選んだ」活動であることが責任をもって取り組むことに繋がったのだろう。そして、その自分からしようと決めた活動に毎日繰り返し取り組むことで、やり方がしっかり分かり、自信をもって取り組むことが出来るようになってきたのだろう。また、5歳児集団の中では、育ちがゆっくりで、力を出す機会が少ないD児ではあるが、自分より年下の友達とのかかわりの場であるということで、いつも自分が教師や周りの友達からしてもらっているように教えてあげることが出来たのだと考える。

①自分が選んだ仕事の間である②毎日取り組んでいる活動なので自信をもって取り組める場である③4歳児とのかかわりの場であるという場の設定が一人一人から自信と責任を引き出すことに繋がったのだろうと思う。

一年間取り組んできたかがやき隊の活動を4歳児に引き継ぐために、かがやき隊を紹介する場(かがやき隊のつどい)を設けることになった。まず、全員で仕事内容ややり方、楽しかったことややって良かったと思うことなどをポスターセッション風に伝えるということを共通理



解した。その後、それぞれの隊に分かれ、ポスターをかいたり、話す内容を考えたり、話す練習をしたりなどの活動を進めることにした。

事例1-⑤ 「ニワちゃんと会話ができますよ」

2月19日(水)

<しいく隊紹介について話し合う姿から>

しいく隊のメンバー（E児、D児、F児、G児、H児、I児、J児、K児、L児）が円陣をくみ話し合っている。

E児 「しいく隊は動物の世話とかをします」

F児 「散歩とか」

E児 「散歩とかもします。それと雨の日は散歩はしません。水をあげてください」

F児 「そんなことは言わなくていいよ」

教師 「しいく隊になりたいって言う人がたくさんになる時には何を話したらいいと思う？」

E児 「楽しかったこと、そうだ、あれ言おう。前、にわとり持てなかったけれど持てるようになりました」

教師 「そう、そういうのみんなで言ったらいんじゃない」

D児 「ニワちゃんと会話ができますよ」

K児 「会話って何？」

教師 「にわちゃんとお話ができるんだって。すてきね。それくらいD児ちゃんは頑張ってにわちゃんのお世話したもんね」

D児 「うん」

K児 「K児がニワちゃん抱っこしたら足ばたばたさせるよ」

D児 「散歩とかつれていくとニワちゃん気持ちよくなるんだよ。なんか、コーンっていったらおなか空いているんだよ」

教師 「おなか空いているとか気持ちいいとか分かるんだ。すごい、やっぱりそれは毎日お世話したからだね」

K児 「K児は手が痛くて毎日に行けなかった」

教師 「うん、K児ちゃんは手の調子が悪かった時は行けなかったけどちゃんと頑張っていたのS先生から聞いて知っているよ」

F児 「F児もニワちゃんと遊べたことが良かった」

J児 「僕はかめと遊べて良かった」

E児やD児の話をしている内に他のしいく隊のメンバーも自分なりの思いを少しずつ出し合うようになってきた。

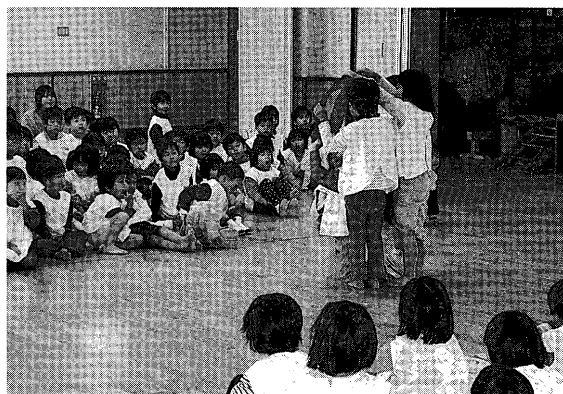
本番では「しいく隊になってよかったこと」を自分の言葉で一人ずつ自信をもって話すことができた。

<G児の連絡帳から>

3年間、特にこの一年でG児も成長したと思います。年長になり、係活動が始まり、つどい隊、しいく隊としていましたが、しいく隊になってからは、毎日のようにニワちゃんの話が出てきました。参観の時寒い日でしいく隊の仕事を見ましたが、楽しそうにしていました。今日は、「しいく隊がんばっていたこと先生褒めていたよ」とG児に話すと、とても喜んでいました。G児は「ニワちゃんのことが気になっている」と話していました。時々、S先生にニワちゃんの様子を聞いているようです。

D児の「ニワちゃんと会話ができますよ」などD児の言葉からは、かかわりの深さと自信が感じられる。この、D児の姿に代表されるように、かがやき隊のつどいに向けての活動では、一人一人がしっかり自分の活動を振り返り、自分自身の変容に気付いたり、充実感をもったりする姿がどの隊にも見られた。また、本番を迎えるまでの間に、自分達で声を掛け合い、隊ごとに自主練習に取り組む姿も見られた。それは、一つの仕事に責任をもち、毎日取り組んできたからこそ生まれたものであろうと考える。

つどいの後、つどいで使用したポスターを4歳児保育室前の掲示板に貼っておいた。それを見ながら「私、もう何隊になるか決めたよ」「僕は〇〇隊になるんだ」と言う4歳児の姿からは、5歳児に憧れの気持ちをもち、年長組になることに大きな期待をもっている様子が伺えた。そして、かがやき隊の活動が、園の生活の中にしっかり根付いたと感じた。



・「サッカー」を視点に

事例2 遊び(サッカー)を通して

平成13年度の研究紀要101ページに述べられているように、私達は「創る生活」ぶりを、「さまざまな状況のもと、特定の集団内の成員同士が、互いに考えや思いを出し合い、説得したり、納得したりしながら合意を形成し、目的に向かって進んでいく姿」と捉えている。サッカーという遊びは、遊びを進めていく中で自分たちに必要なルールを創っていくなど、創る生活の経験がたくさん含まれている遊びなのではないかと考えた。また、今年度はサッカーワールドカップが日本で開催される年であり、社会状況からも、絶対サッカーに興味を持つと思われたし、社会の出来事を自分たちの遊びの中に取り込んでいく姿も期待したかった。

そこで、サッカーの場を切り口に、子どもたちの姿を追うことにした。

事例2-① 「どうして、ボールが3こなの？」

6月21日(金)

5月末から始めたサッカー。最初は6人くらいでボールを追いかけていたが、どんどん人数が増えていくにつれ、ボールもいつの間にか3つになっていた。

ある日、普段は違う遊びをしているP児がサッカーに参加したときのことだった。P児が首を傾げて何やら考えているようだった。

教師 「P児くん、どうしたの？」

P児 「どうしてボールが3こなのかなあ？」

教師 「このつきほしサッカーはいつも3こ使ってるんだよ」

P児 「でも、本当のサッカーはボール1こだよ」

教師 「そうだね。P児くんは1このほうがいいと思う？」

P児 「うん」

P児 「ねえ、みんな、サッカーはボール1こだよ」

大きな声で叫んでも、誰も聞こえている様子がなく、一生懸命ボールを追いかけている。しばらく黙って眺めていたP児のところへ、ボールが転がってきた。P児は素早くボールを抱え、かたづけ用のカゴの中に入れてしまった。

P児 「これでよし」

しかし1分も経たない内に、ボールは再び3つになっていた。P児は何か言いたそうにしながらも、その場を離れ、別の遊びの場へ行ってしまった。



‘サッカーはボール1こ’を使ったスポーツだということは、当たり前のことである。初めてボールが3こに増えたときには、教師もボールは1こだということを言おうと思ったが、ボールを蹴るときの子どもたちの生き生きとした顔を見、しばらく様子を見守ることにした。ボールを持っていない子は持っている子をうらやましそうに見ており、転がってきたボールを必死に追いかけていた。「とにかくボールを蹴りたい」という気持ちが感じられた。そこで、子どもたちがまず体を思いっきり動かしてボールを追いかける姿を一番に考え、複数のボールでのサッカーを続けることにした。

そんな中、事例の日に、普段のサッカーを知らないP児が、その様子を見、「何かおかしい」と感じた。もともと約束を守ることをよしとする性格に加え、しっぼとりなどの、ルールを守った遊びを経験してきたところだったので、好き勝手やっているサッカーが変だと感じ、「ボールは1こにして、ルールを決めたい」と思ったのであろう。しかし、現時点でボールを蹴ること自体を楽しんでいる子どもたちにとって、細かいルールは必要がなかった。それを感じてか、P児もこの日はそれ以上何も言わなかったが、この先ルールが必要になってくれば、みんなで話し合っ一緒につくっていきたいと考えている。

事例2-② 「だって、青チーム人数多いもん」

10月3日(木)

のびのびフェスティバル(運動会)が終わった次の週、久しぶりにしたい遊びの時間が確保され、予想通りサッカーが再開された。今までどおり、ボールも3こ、みんなが思いのままにシュートを決め、楽しんでいたときのことである。白チームのキーパーをしていたQ児がボールを2こ抱えたまま、泣き出した。

Q児 「青チームずるいよ」

R児 「何で？」

Q児 「だって、青チーム人数多いもん」

みんな 「……………」

S児 「じゃあ、ほく白になる」

R児 「じゃあ、おれも」

T児 「おれも」

U児 「おれも」

教師 「ちょっと待って。みんな白になったら青が少なくなるよ」

R児 「じゃあ、やっぱり青」

T児 「おれも」

Q児 「1、2、3、4、…… 白もうひとり」

Q児は人数がそろったことを確認した後、ボールを蹴り込み、サッカーが再開された。

これまでは人数が多かろうが少なかろうが関係なしにボールを蹴ることを楽しんでいたのに、なぜ急に人数にこだわりだしたのか。その原因はのびのびフェスティバル（運動会）のつきほし対抗リレーにあると考える。

リレーでは、力いっぱい走るだけでなく、自分たちで話し合っ規則を決めたり、作戦を立てたりといった過程を大切にしてきた。その話し合いの話題の一つに、人数のことがあがった。つき組対ほし組でのリレーなのだが、人数はつき組が29人、ほし組が30人であった。そこで、つき組の話し合いで、一人少ないからどうするかを考えた。結果的に「一番最初に走る人が最後にもう一回走る」とう意見に決まった。その後何度かの練習で、「今日は全員いるから、つき組の先頭が2回走る」「今日はつき組欠席無し、ほし組が2人欠席だから、ほし組の先頭が2回走る」といった人数の確認を毎回してきた。その経験が、「サッカーで人数をそろえなくてはいけない」という意識につながっていったのであろう。

事例2-③ 「ここゴールにしようぜ」

1月15日（火）

2学期は12月になっても、雨が降っていないときには、外に出てサッカーをしていた。しかし、3学期は、始業の日から大雪で、雪遊びはできたものの、雪が解けても雨の日続きで、サッカーができない日が続いた。基本的に硬いボールは室内で蹴ってはいけないという約束をしていたため、遊戯室ではサッカーができなかった。

そんなある日、R児とS児が新聞紙を丸め、そのまわりにガムテープを巻き始めた。そして徐々にドッチボールくらいの大きさの玉ができてきた。

- R児 「先生、このボールで遊戯室でサッカーしてもいい？」
教師 「うん、これなら遊戯室で使っても大丈夫だね」
R児 「よし、S児、いこうぜ」

遊戯室で2人が試し蹴りをしていると、2学期にいつもサッカーをしていたメンバーが集まってきた。

- T児 「何しとるん？」
S児 「サッカーだよ」
V児 「まぜて」
R児 「うん、いいよ。」
W児 「どこにシュートすればいいの？」
R児 「あっちは戸のところで、こっちは・・・ここゴールにしようぜ」

積み重ねてある大型積み木と巧技台の間まで走って行き、指差した。

- R児 「おれあっちにシュートする」
T児 「おれも」
S児 「ほくこっち」
X児 「おれキーパーしよっと」

いつの間にか10人以上の人数が集まっていたが、それぞれがどちらかのチームに入り、

今年度初めての室内サッカーが開始された。途中でボールが壊れて修理する場面も見られたが、どの子も久しぶりにボールを蹴ることに喜びを感じているようだった。

事例2-④ 「帽子とってこうぜ」

1月16日(水)

次の日、室内用のサッカーボールを1つ、子どもたちが自由に使えるように用意した。また、遊戯室の真ん中に、遊戯室を2等分するように、ラインを1本つけておいた。

予想通り、遊びの時間には室内サッカーをしようと遊戯室に10人くらいが集まってきた。そしてQ児が新しいボールをうれしそうに抱え、みんなでセンターラインをはさんでキックオフの準備をしていた。

- W児 「チームどうするの？」
X児 「こっち何チームや？」
Z児 「だれがいっしょかわからん」
Q児 「じゃあ、帽子とってこうぜ」

しばらくして、帽子を持って集まってきた。

- Q児 「おれ、白チーム」
R児 「おれ青」
T児 「おれも青」
Z児 「ほく白」
X児 「おれどうしようかなあ」

そう言いながら、みんな帽子をかぶっていった。

- Q児 「なんか青多くない？1、2、3、4、5、6・・・人いるやろ」
Z児 「1、2、3、4、5、6・・・いっしょや」
Q児 「O.K. 始めよう・・・シュート」

こうして室内サッカー2日目が始まった。みんな、思いっきりボールを追いかけていた。しばらくしてY児が教師のところへやってきた。

- Y児 「先生、アンセムは」
教師 「つき組のラジカセに入ってるよ。持っていってもいいよ。使い方分かる？」
Y児 「うん」

自分たちでラジカセを操作し、音楽が鳴り始めた。気分も盛り上がってきた。外でやっていたときと同じような状況で、サッカーを楽しんだ。

昨日から始めた、初めての室内サッカー、そして、初めて、みんなでボール1つを追いかけるサッカーであった。

これまでのサッカーは「ボール」があり「ゴール」があった。室内サッカーを始めるに当たり、まず、「ボール」を自分たちでつくった。そして、遊戯室にあるもの（扉）や空間（大型積み木と巧技台の間）をゴールに見立て、サッカーを楽しむことができた。これまでに、自分に必要なものをつくって遊ぶ経験や、イメージを膨らませる経験、イメージを実現するために場をつくって遊ぶ経験など、様々な経験があったからこそ、今回のサッカーの場も自分たちで作り出して楽しむことができたのであろう。大学生から、バスケットボールを教えてもらったときに、センターラインを挟んでチームごとに並んだことや、巧技台を積み重ねてバスケットゴールにしていたことも生かされたように思う。そう考えると、センターラインを1本引いておいたことが、コートイメージしたり、チームに意識がいくために適した環境だったといえる。

また、チーム分けをするために「ぼうし」が必要であることに気づき、利用した。これまで、チーム対抗のゲームをするときに人数を合わせる経験をしたり、遊びの中で人数によるトラブルを経験してきたことで、ぼうしを使ったチーム分けを自分たちの新しい遊びに活かすことができたのであろう。

これまでは、まずボールを蹴ることを楽しむ姿が一番を考え、3個以上のボールを使ってのサッカーを続けてきた。しかし、今回の室内サッカーでは、初めてボール1つをみんなで追いかけるサッカーをしている。今後、このボール1つのサッカーを続けていく過程で、自分たちに合わせたルールを一緒につくっていきたいと考えている。



事例2-⑤「ボールがないんだけど」

2月18日（火）

のびのび表現会が終わった次の週、久しぶりにしたい遊びの時間が確保された。天気もよかったため、予想通りサッカーが再開された。今までどおり、ボールは3こ以上使い、みんなが思いのままにシュートを決め、楽しんでた。

2月19日（水）

次の日、ボールかごの中を、サッカーボール2個だけにしておいた。朝のつどいの後、数人の男児らがいつものように外に飛び出していき、サッカーを始めた。しばらくしてから、U児とR児がテラス付近をウロウロしているのが見えた。

教師 「どうしたの？」
U児 「先生、ボールがないんだけど・・・」
教師 「えっ？あそこでサッカーに使ってるよ」
U児 「だから、そうじゃなくって・・・少ないって事なんだけど・・・」
教師 「昨日、かたづけしなかったんじゃない？」
R児 「そんなことないよ。ぼく全部かたづけたもん」
教師 「そうだよ。大切につかってるもんね。
でも、ボール2個だけだったら、だめなの？」
U児 「別にいいけど・・・」
教師 「じゃあ、いいやん」
R児 「よーし」

と言いながらR児はボールに向かって走っていった。

U児はまだ何か言いたそうな顔をしながらも、コートに戻っていった。

2月21日（金）

2日後、いよいよボールかごの中を、サッカーボール1個だけにした。この日、ついに、外のサッカーコートで、初めて、ボール1個のサッカーが展開された。いつもだったら、すぐ手でボールを持って都合のいいところから蹴り出したりするところが、みんなひたすらボールを追いかけていた。ボールが1個だったので、中にはほとんどボールにさわれない幼児もいたが、あとで感想を聞くと、ほとんど全員が「楽しかった！」と言っていた。

当初、教師の予測では、ボールを1個にすることでトラブルが生じ、そのトラブルを解決しようとする中でルールが必要になってくるだろうと考えていた。そしてそこからルールづくりに繋がっていくことを期待していた。しかし、実際にボール1個のサッカーを通して子どもたちは、「1個のボールをひたすら追いかける楽しさ」を感じたようだった。とにかく転がっていくボールをみんなで追いかけていた。でも、中には、キーパーになってゴールを守る子、ディフェンダーになっている子など、いろいろな子がいた。別にポジションを相談したわけでもなく、自分で決めたポジションなのだろうが、実際、相手が攻めてくれば必ずボールが近づいてくるわけだし、ボールを蹴れる確率も高いかもしれない。これまで、複数のボールでのサッカーしか経験していないはずなのに、ボールが1つになったらなつたで、その与えられた環境の中で、楽しむことができることが分かった。

修了を目前に控えた日、5歳児にとっては最後のしたい遊びの時間となった。修了式の練習つづきでじっとしていることが多かったためか、9割以上の子どもたちが外へ飛び出していった。毎日のようにサッカーを続けてきたQ児は真っ先にサッカーボールを抱え込み、みんなに向かって叫んだ。

Q児 「サッカーしようぜ」

R児ら 「おう、しようしよう」

男児らが集まり始めた。

R児 「おれ、青ね」

T児 「おれ、青」

S児 「ほく、白」

V児 「青、どっちに攻めるの？」

そんな会話をしながら、ボールが蹴り出された。

U児 「先生ラジカセ持っていくね」

教師 「うん、わかったよ」

ドッチボールも出てきて、ボールがいつの間にか4個になっていた。ボールの数に関して誰も何も言わず、子どもたちはただひたすらボールを追いかけ、思いっきりボールを蹴ることを楽しんでいった。

一時期、ボールを1個にして、その1個をみんなで追いかけるサッカーを楽しんでいたこともあったが、結局最後には、複数のボールでのサッカーに戻ってしまった。

今年度の5歳児にとっては、複数のボールを使っのサッカーこそが、自分たちのオリジナルのサッカーだったのであろう。



～一年を振り返って～

平成14年度の5歳児の生活（自分達が創る自分達の生活）を①かがやき隊の事例を通して②遊び（サッカーを通して）③つどいを通して振り返り、考察したい。

① かがやき隊の事例を通して

○「係活動」・「当番活動」

かがやき隊の仕事の中には、昨年度まで当番活動として取り組んでいたものがいくつかある。そのどれもが当番活動として取り組んでいた時と比べ充実したものとなっている。事例にあげた飼育の仕事もこれまでは、当番活動としてこなしてきたものである。46ページにも述べたが、毎日小屋の掃除や餌やりをしているうちにA児がニワトリのことを「ニワちゃん」と呼びながら世話をするようになった。そしてその呼び名は瞬く間に園中に広まった。これまでも毎日誰かがニワちゃんの世話をしていたわけだが、名前は付かなかった。この事実一つをとっても「係活動」と「当番活動」では、生き物に対するかかわりの質が全く違うことが分かる。ニワトリやカメを散歩させたり、滑り台など遊具で遊ばせようとする姿、50ページ事例1-⑤のD児の「ニワちゃんと会話ができますよ」などの言葉、51ページG児の母の連絡帳から読みとれるG児の姿などから、生き物と触れ合うことで、生き物に愛着をもち、生き物と友達になり、生き物の気持ちに気付くようになるプロセスをしっかりと歩んでいることが伺える。このような姿はしいく隊の幼児だけに限ったものではない。しいく隊の幼児らが愛情をもち、生き物にかかわる姿は、他の幼児らにとってのモデルとなり、一人一人の生き物に対するかかわりの質を深めることに繋がっていた。しいく隊の存在が園全体の幼児の生き物に対するかかわり方を変えたと言っても過言ではないと思う。

しいく隊のように係活動として取り組む方が良いと思われる活動もあれば、当番活動で取り組めば良い活動もあるだろう。また、4歳児は経験を広げるというねらいで当番活動で取り組み、5歳児は深めるというねらいで係活動として取り組むというように、集団の育ちにより活動の在り方を常に考えていく必要があると思う。

○「責任」・「自己肯定感」

人前で話すことが苦手なB児が餌集めのためにつどいで話す姿（46ページ事例1-①）、きちんとしておいたはずの餌箱が落ちていることに対するC児の言動（47ページ事例1-②）、4歳児に飼育の仕事を教えてあげるD児の姿（48ページ事例1-④）などからは、責任をもって仕事をやり遂げることを体で学んでいることや、自信をもって仕事に取り組んでいることがわかる。

したい遊び中心の生活の中では「責任をもって取り組む」ということを経験するのが難しいのではないかと思う。かがやき隊の取り組みは、その中に「責任をもって仕事をする」ということを学ぶ状況が仕組まれており、幼児にとってはそれを学びやすい状況であったので

はないかと考える。

また、4歳児に仕事を引き継いだ後、「自分達がいなくてもニワちゃん大丈夫かな」と心配する姿（51ページG児の母親の連絡帳）など幼児らは責任と自信をもって仕事をする姿を認められたり、褒められたりすることを通して、自分の存在価値を感じ、自己肯定感をもっていることも伺える。したい遊びの場よりも枠がはっきりしている（仕事である）場の方が、自己肯定感がもちやすい幼児もあり、その意味においてもかがやき隊の取り組みは大きな成果があったと言えよう。

○「気付き」→「思考」→「工夫」→「発展」

47ページ事例1-②のC児の姿のように今までは見過ごしていたことが、毎日同じ仕事に取り組むことで気付くようになる姿がいろいろな場面で見られた。また、続けて仕事をしていくために「どうしようか」と思考し、工夫が生まれる。それを認められることで次は「発展」が見られるようになる。このプロセスには時間を要する。かがやき隊の取り組みでは、約5ヶ月という時間を保障した。また、同じ仕事に取り組むということで教師の直接的なかわりを最小限におさえることができ、自分達の力での取り組みが保障されていた。このような環境の中に「気付き」→「思考」→「工夫」→「発展」のプロセスを経験することが仕組まれていたのだろう。このことを意識した上で援助していくことが、幼児らが自分達で自分達の生活を創ることに繋がっていくと考える。

② 遊び（サッカーを通して）

○ボールの数

一年間、ずっと、サッカーが続いた。多くの5歳児がサッカーに熱中し、サッカーを通して、運動する心地よさや体を動かす楽しさを、十分に感じることはできなかったのではないだろうか。その背景には、ワールドカップ開催などいろいろな要因が考えられるが、ここではボールの数に着目したい。今年度の5歳児のサッカーはボールを複数使っていた。

ボールを複数使うことで、

- a みんながボールを蹴ることが出来る
- b コート内の動きが止まらない（常に体を動かしている）
- c 一人一人がボールに触れる機会が多い
- d 参加する、やめるが比較的自由
- e 女兒も気軽に参加できる
- f ちょっとしたことトラブルが起きにくい（立ち直りが早い）

など、いくつかのプラス面がみえてきた。a、b、cから分かるように、体をたくさん動かすことができる環境ができていた。体を使って遊ぶ心地よさに直接つながるところである。cによる技術の向上も伺えた。dのような自由な雰囲気があったので、外遊びや運動遊びをあまりしない幼児の中にも、興味をもった幼児が次々に参加してきた。eのように女兒も何

人かサッカーに参加したことがあった。fに関しては、例えば一つのボールをめぐるトラブルになったときに、他のボールでゲームが続いているために、全員が集まってくるわけではなく、騒ぎも大きくならないために、トラブルの当人もいつの間にか立ち直っている、といった状況である。自分達なりに解決し、本人も納得して立ち直っていたので、それでよしとしていた。しかし、よく考えると、トラブルは当初経験させたいと考えていた「ルールづくり」に目を向けるきっかけになるところである。そこで、ルールに目を向けられるよう、ボールを一つにしようかと考えたこともあったが、やはり、子どもたちが生き生きとボールを追いかける姿を一番に考え、複数のボールでのサッカーをする姿を見守った。

○既成のルールにこだわらないルールづくり

サッカーを通して自分達でルールをつくりあげていくことを経験させたいと願い、当初は、スローインやゴールキックなどの基本的な既成のルールを、幼児らと一緒に取り入れていこうと考えていた。そのために、教師が話し合いの中に入っていったり、ある程度のルールを提案していこうと思っていた。そして、みんなで決めたルールを受け入れて、ルールを守りながら遊ぶ姿を目指すつもりだった。そのためにはボールを1個にして、コートの中でプレイすることが、当然だと思っていた。そこで56ページの事例2-⑤のように、意図的にボールの数を1個にしたこともあった。しかし、幼児らは既成のルールには目が向かなかった。そんな姿から、ボールを複数使ってサッカーすること自体が、これまで自分達で合意しながらつくりあげてきたルールなのではないかと考えるようになった。

○自発的な遊びと生活づくりの関連性について

おそらく、サッカーをやっている様子は、一見ただけでは6月も10月も2月も変わらないものだったのであろう。しかし、子どもたちの技術や充実感は全然違うものであった。今年度の5歳児らは自分たちのサッカーをつくりあげ、思い切り遊び込むことを、十分にしてきた。まさに、幼児期に相応しい生活をしてきたと言えるのではないだろうか。

2学期後半になると、サッカーはもちろんのこと、意図的活動や日常の生活でも充実した姿が見られるようになってきた。例えばR児とS児は、1学期、2学期とずっとサッカーをしてきていたが、3学期になり、表現会に向けての取り組みが始まったとき、進んで太鼓の練習に参加してきた。外でサッカーをしている友達がいたにもかかわらず、自分達は楽器をがんばると言って、毎日練習していた。その結果、R児は大太鼓、S児は小太鼓の楽器をみんなに認められて担当することになり、当日も素晴らしいバチさばきを披露した。劇でも、表現力豊かに自分の役を演じて見せた。また、修了前の大掃除では自主的に運動着に着替えをし、「運動服ってきもちいい～」などという言葉の口にし、かたづけや掃除を進んでやっていた。このような姿から、R児とS児はサッカーを基盤に生活づくりをしてきたことが分かると思う。したい遊びの充実が、生活全体の充実につながっていったのだ。

今年度のサッカーの事例のように、既成のルールを守る姿をめざすのではなく、その集団なりのルールを、その成員同士で納得したり、説得したりしながら合意を形成し、目的に向かって進めていく、こんな経験を積み重ねていくことが、5歳児なりの創る生活につながっていくのだと考える。

③ つどい

今年度、新しく生活に位置づけたものとしてかがやき隊の他に「つどい」がある。一日のスタートをきる「朝のつどい」と一日を締めくくり、明日につなげる「帰りのつどい」である。5歳児なりに見通しをもち生活を自分達で創っていけるようになってほしい、言語表現力（話す、聞く力）を豊かにしてほしいという願いで、取り組み始めた。

取り組みを通して、このつどいが園内で展開されている様々な活動や幼児同士を有機的につなぐ役割をしていることに気付いた。例えば、しいく隊の幼児らが5歳児保育室から離れたところにある飼育小屋の生き物の様子やしいく隊の仕事について話すことで他の幼児らの生き物や飼育活動に対する興味関心が高まったり、実際にその様子を見に行ったりすることに繋がったりしている。サッカーをしている幼児らの「青チームの人数が足りないので、誰か入って下さい」などの呼びかけにより、サッカーに参加する幼児が増えたりする。このように、つどいは、幼児らが情報を発信したり、共有したりする場であり、自分達の生活を創っていくためにとても重要な場となっていた。また、したい遊びを見つけるのが苦手な一日のスタートがスムーズに切れない幼児らにとって、朝のつどいがあることで他の幼児らと共に一日の生活をスタートできるなど、5歳児の生活創り（自分達が創る自分達の生活）には、このつどいの場はとても有効であった。



5歳児 生活過程 2002 ～自分達が創る自分達の生活に向けて～

